



廃食油の回収は、国道29号線沿いに点在する複数の公民館で行われている



廃食油の回収機。試験運行の時には、廃食油を持ってきた人にICカードで証明書を発行できる機器が設置されていた。将来的には、これを徒歩圏内に多数設置し、市民が手間なく回収できるような環境づくりを進めたいと考えている

まちなか利用が 始まったバイオディーゼル燃料

生活者ができる地球温暖化防止の現場から

鳥取環境大学（BDF利用）

わがまちは油田だ！

石油に替わるエネルギーとして世界的に注目を集めているバイオエネルギー。日本でも全国各地でさまざまな試みが行われているが、大学発でまちなかに広めようという事業が鳥取市で始まっている。地域住民から回収した天ぷら廃食油からバイオディーゼル燃料（BDF）を造り出して車の燃料として利用するというもの

ナビゲーター
鳥取環境大学
環境情報学部 環境デザイン学科
教授兼学科長、
NPO法人鳥取発エコタウン2020
代表 吉村元男

キャンパスと6kmほど離れたJR「鳥取」駅を結ぶスクールバスを利用する学生は多い



N P O 法人
鳥取発エコタウン2020

〒689-1111 鳥取市若葉台北1丁目1番1号
鳥取環境大学 環境デザイン学科
吉村研究室内
TEL&FAX 0857-38-6771



大学内の食堂裏に設けられた製油プラント。JRのコンテナを再利用し、製油の機械も廃棄されるものを探して手に入れたという、環境に配慮したハンドメイドのプラントだ

だ。最初は大学での実証実験から段階を経て、現在では地域住民はもちろん、鳥取市なども加わり、市内を走る「100円バス」くる梨^{くるり}や同大学のスクールバスに本格的に利用が開始されている。

その推進役となったのが、鳥取環境大学をはじめ市民や行政などの関係者で構成される「NPO法人鳥取発エコタウン2020」である。その代表でもある同大学の吉村元男教授は、「私は、『わがまちは油田だ!』と提唱しています。まちの中にたくさん眠る、捨てられるだけの運命だった天ぷら油を燃料にすることで、エネルギー問題が解決するのはもちろん、原料は菜種ですから二酸化炭素を増やさない、まさに一石二鳥にも三鳥にも効果を生み出すことができる試みです」と説明する。

京都市などでもBDFの利用が行われているが、鳥取市の場合、ボランティアで油を集めているだけでなく、将来的には地域通貨などを取り入れたコミュニティの核となる事業と考えている点が現実的だ。試験路線を利用した住民たちは、乗り心地も普通のバスと変わりませんし、廃油を持っていけば無料でバスに乗れてとてもありがたい。高齢者が増えているエコタウンの新しい足として便利です」と、今後にますますの期待を寄せている。

これらの考えの元になっているのは、吉村教授が提唱する「環節都市(アースロポッドシティ)」という概念。その実現のために必要なのは、BDFをはじめ、携帯電話などのIT技術、地域通貨といった既存の手段や技術であり、これらを上手く組み合わせることでサステイナブルな社会の構築ができるという。鳥取環境大学を中心に、こうした大胆な試みが、今、進められている。

(文責・CELL編集部)

CEL



「天ぷら油が燃料ならば、出てくるガスに含まれる有害物質は軽油の半分ほどに減る。非常に環境に優しい燃料なのです」と語るナビゲーターの吉村元男教授



天ぷら油を燃料として利用している鳥取市の100円バス「くる梨」

